



不

不白翁句集叙

玉野

院藏

本邦之和歌猶如中華之詩也
 凡有感於情必形於言矣
 謂異於其撰乎哉和歌之道
 岐而有聯歌有俳歌亦如詩
 有古風近體然其溫柔敦厚
 優遊不迫此愈於彼也遠矣

蓋籍 本邦之性情使然焉
自斯集去蓮華老翁已辰美
夕弄花酒月所寓情于俳辭
之亂什也翁隆固不用意締
持乎其天然韻致可挹而知
矣自杜至李前後諷咏無一
句稿者矣振々亭主至迹或

密談及俳句以隨聞隨記輒
整然成卷翁令嗣日々茶會主
得之珍艷不唯辭帶千至遂
謀上梓廣布同志願激年并
云夫翁之德之劬也實足不
朽乎千載定假形一集隆余
不能為望甫抑復為曹丘子

翁天資坦率不脩邊幅不狹
不泛齡踰八袞猶當嬰鍊出
神仙人矣且至其粹於柔
儀則海內嚮慕之誠以斗山
咨寧之可謂盛矣
寬政戊午季冬

蔭涼謹堂書



不念翁自集序

茲亦蓮華菴のありふ念翁ハ
茶之乃先達カクテ盧玉川ハ
波陸桑葺ハ肉利抛筮也者を
以テ人々紀昌新子の産カレ
姓ハ藤原氏ハ川上ト云々
新玄彦子流ハ江都ハ

千六歳の時千先生に母を尋ね
門に入京時ふむと千家と
しとふ茶をなむと
雷有言重とふと
このく日おの修り切未練磨
礎礎とふと美玉の照成と
陽礎とふと雄母如重なり
ちりりくくはるの事後志
成然しふと芳くとと下
ち家り風がらんとあはあ
ていささあ教ふとと
揚名しとと故とあくとと
茶屋下ととと松とと
秋風ととととと東人
如心

三番叟

香にけるさ實ハ鈴なりや梅乃ま

或人元目乃津流の盃、松乃枝の

あふれのまるとあせよとあるふ

款作くめらみや松乃若み

芳中り画さる梅一筆

寫やそ月早き之假中

伊勢大輔の賛

今ハ絵小白ひゆるふ撮人

七福神

蛸子

初時乃海もより野や橋朝

大黒

まゝさきさ春や歳世の丸既中

思沙門

巻の運むくく多門乃力ふ

弁天

春風や松乃志くも琵琶の海

布帘

福祿の毛もや苑乃ま既中

寿老人

歳春乃水鏡つそへむ老老人

福祿壽

心くも若ふて富士のてへんふ

宗雪の松島行脚子

永き日と我松嶋そとすうか

令得まゝ

一夢を六浦日とあんな郭と

竹の子や百代もけりやうやと

千世いふ世竹葉舞や初憾

是は素氏の孫を頌ふや

日光の句

華嚴

日如光涼き朱の御橋の子

う川ふちは菟まゝ滝の音

裏見

これお井の義みろ流や夕の葉

大日堂

大日の光作くや木下音

蝙蝠や二日の月とをり鳥

梅女の画賛

羽衣や苑と見る梅乃美うら

如心并五十回忌遊居十句

師の光作をいさる一月乃秋

又光陰法炮乃いさる常に

先師の諸有りこれい

法炮乃いさる間や月此二十年

お斗七星ありいさる七佛あり

晋に七賢ありいさる七子

仙あり七情七教人事乃要これ

いさる七事いさる家の七室いさる

あれ

花月 光増秋や花月乃二十年

且座 萩翁のいさるや家のいさる

廻花 活これ苑を干将のいさる

茶カワキ 色くの月やふのいさる

廻炭 ぬ糸すふ山他いさる

一二三 一二月人いさる花乃一二三

数茶 杖乃重をいさるいさる救茶いさる

花寄

秋の野の跡おろり荷乃敷

源氏画賛

明月やふ乃弱の浦はらふ

蘇方翁十三回忘し振こま

ふく

侍人をく露のふん紫れま時水

之夕賛

まじりやけこ人乃妹の言

ま陽よ

菊乃日や影祖万歳あこ葉

鶴鶴や汐乃平波を疾世衆

達一忘や不二六返乃一う白

達一忘や斤岡山の月一うれ

振こまにま嵐雪翁乃百回

忘進着につふあて

草七本も皆成佛の時あうふ

曉八や少さしく星乃乳

三駘云是日之宿の曉に星は
ある巻詞也

妻よのよるこい魚乃吹き水

十牛乃園斗

尋牛

うしと牛きりぬるや五月雨

見跡

暑き日乃延も牛の轍うか

見牛

うよく尾の牛足甘くり夏意

得牛

風や牛よひうね縄よき

騎牛
帰家

善道さ春乃夕や庚牛

牧牛

苑さるる表ひえり黒牡丹

忘牛

足さしあや静にしさく

人牛

苑鳥のうけも善てあれ月

俱忘

通本
還源

見歩行しを何事う宿の梅

入廊
垂手

後うへあおみから葉れ露うか

如左蓮華水不凍世間法とは法
華經の要文也され我辭世は是
と云ふと朽くの筆ささこあり
——去年乃杖世と長月とある
の外なることありはと云くの瘰
養も老のうるれはきのとあり
志は——とありはと云くはと
まひぬらと云ふは

八十九年

水画無痕

栽培了也

栢樹帰根

木か——や栢樹を根よりする時

嗟乎とけらるるに筆よりとあり書

付けるる託念ありとあり

手得の書は深の意を
秘のおく皆傳は流るる
物換り早得ふも志こり
了と身は法をせんも各
孤くも心を一時未
志はと命をいせり先
守よ年を朽ゆ心先
あはれを白糸よ志

